

平成11年 第62回～第72回



第62回 高和元彦さんの究極のスーパーアナログのお話と演奏を堪能した後、ハワイ旅行抽選会に望むスタッフ。



第64回 細田社長に祝福されるNO 1977の当選者



第64回 「シャンソン・・・それは心の応援歌」
美しいシャンソン歌手 朝風加世さんのライブは大人気でした。

第65回 「映画と音楽、お楽しみはこれからだ」
グラフィックデザイナー 和田誠さんと映像評論家 福田千秋さん



第65回 日本屈指のグラフィックデザイナー 和田誠さんの作品、
展示場と化したコンサート会場。週刊文春の表紙を描き続けて25年
になるといふ・・・





第66回「鈴木治彦ジャズサロン / 心に残る名演奏」
フリーキャスターとしてTVに大活躍をされているベテランキャスター
鈴木治彦さんの名盤コレクション。



第67回「デュークエリントン生誕100年特集」
日本のジャズ評論家の重鎮、瀬川昌久さん、気鋭の悠雅彦さん
をお迎えて。



第68回 デクシー・セイントの皆さんによるハッピーなライブ。
時間を忘れる楽しいコンサートでした。

す	ば	ら	し
き	小	椋	佳
の	音	世	界
歌	語	り	の
こ	こ	ろ	と
は			

第69回 小椋 佳さんをお迎えて
「すばらしき音世界、歌悟りのこころ」をさく

第69回 やっぱり小椋さんのお人柄か。
いつもよりは女性のお顔が多いようです。



第69回 やさしい語り口の中に偉
大な才能を見た...小椋 佳さんの
音楽世界は私達を魅了しつつ。ア
ツという間の2時間でした。

小椋佳の「歌語り」の音楽世界を レコードの情感豊かな再生で堪能

次世代オーディオのDVDオーディオやSACDなどが登場し、音楽再生の環境はデジタル化の中を突き進んでいるが、20世紀の人類の遺産ともいえるアナログレコードに刻まれた音楽を聞きながら、アナログの魅力を堪能するコンサートが今も続いている。



歌声そのままでの語り口の小椋佳さん

レコードコンサートに会場 いっぱい約100名が参集

名演、名曲をアナログレコードで振り返りながら、音楽鑑賞の奥行きと喜びを堪能できるとして評判の「千代田チャリティコンサート」(後千代田テクノル、オルトフォンジャパン 共催)が9月22日開かれた。今回は7年め第69回で、シンガーソングライターとして幅広く活躍する小椋佳さんを招いた記念コンサート。題して「すばらしき小椋佳の音楽世界、歌語りのころとは」で、会場いっぱいの約100名が詰めかけた。

このコンサートの世話役で進行役を務めるオルトフォンジャパンの前園氏は、「『歌語り』という日本語はないが、小椋さんを最もよく表現できるような気がする」と小椋さんを紹介。目の前で冒頭に選んだ曲は「街角にすれば」。眼前の小椋さんの声そのままに瑞々しい20代の小椋さんの歌声がレコードから流れてくる

と、会場は、やさしく、切なく、素直な響きの小椋ワールドの音楽世界に一気に酔うことになる。しかもレコードの冒頭には蒸気列車の走り過ぎるサウンドが生々しく情感豊かに記録され、アナログレコードの良質な味わいも溢れんばかり。アナログ盤製作時代の匠たちが小椋佳の

音源に録音されたオーディオ機器



音楽に出会った喜びは、冒頭にして極まっていた。しかし、「楽譜は書けませぬ。作曲は専ら詞を口ずさんでいると自然にメロディになるのでそれを録音して」や「美空ひばりさんとの仕事の時に、勤めがありまして…」の返答に、「あら、どこの刑務所?」のやりとりがあった話など、小椋さんの軽妙なトークが会場を沸かせた。

最近の小椋さんは西洋のミュージカルではなく、日本独特の「歌語り」による音楽劇も提案・プロデュースし、演出、出演もして活躍中。名曲の数々を聴かせる合同にも「下と下のシャープの間には無限の音があると思う」「明治以降、日本の学校音楽が西洋音楽ばかりになってしまった、もうモノマネ大会は止めなければいけない」など、小椋さんは持論の音楽哲学もさらりと披露。レコードコンサートを「刷り込まれたものにしていく」。

来場者は小椋さんの人と音楽に触れ、日本の秋の夜長を一足先に楽しんだ。



熱心にレコードを見る来場者

オトフォンのユニークな語り



小椋佳氏(右)と前園社長
ねのユニークな語り、日本人の独創性、歌謡界の第一人者としての努力について話していた。

放射線測定機や原子力発電所、病院のレントゲンなどの安全管理システムを製造、販売する千代田テクノル主催でオトフォンジャパンが協賛する「千代田チャリティコンサート」の第六十九回目が、九月二十一日午後六時から東京・千代田区湯島の千代田テクノル本社ビルで開催された。

第69回チャリティコンサートを開催(オトフォンジャパン)

今回のコンサートはオトフォンジャパンの前園社長の古くからの知人、シンガポール出身の小椋佳氏を招き、「すばらしい小椋佳の唄、歌謡界の第一人者」と題し、「まにまに」をテーマにした「まにまに」を小椋氏の作詞作曲のLPレコードを聞きながら、前園社長の司会進行により、トークもふたたび交わされた。会場は約千名の来場者で満員の盛況。小椋氏は、梅沢喜美男のヒット曲を基に作られた長調の曲だったが、その曲を作った百の年後から小椋氏の曲を作ることになった。時間もないことから、重調の短調にしたのがヒットにつながったと驚嘆も述べた。

また、まひばりの「愛燦々」は、元々は昔から小椋氏が好きだった三橋美智也向けに作ったLP用の曲だったという話も披露された。



第70回 フランス料理の鉄人、「ヴァンサン」のオーナーシェフ城悦男さんのフランス修行時代をさく。



第70回「料理のエスプリ、音楽のエスプリ、その心は調和」城悦男シェフより見事なシャンパンがふるまわれました。

千代田テクノル主催、オトフォンのユニークな語り交えての懐しのLPレコードコンサートになった。当日は、LPレコードで聴く「第六十九回 立見客も出る約百人が詰めかけた。千代田チャリティ・コンサート」が九月二十一日、東京・湯島の千代田テクノル本社ビルで開催された。小椋氏は、六年前まで銀行第一勧業銀行、勤めのサテライトの傍ら歌手、作曲家として活躍していた。



LPレコードで聴く 千代田チャリティ・コンサート

詞・作曲家という希有なユニークな存在で、作詞・作曲・演奏など、ユニークな存在で人気を集めていた。六年前に銀行を退職してからも五十歳で東大大学院に進み、最近では新しい音楽劇の創設を提案し、自らプロデューサー、ディレクター、演出家として手腕を発揮している。同コンサートでの語りもユニークで、自身の生立ちやアーティスト仲間のエピソードなどを盛り込んだトークが、入場者の笑いを誘っていた。

「音譜は苦手なので書かない。作る詞を読み返して活字する。ユニークなものが最終的なメロディになることが多い。従って、作曲はギターもあまり使わないで口で作っている」と、小椋氏が語った。『愛燦々』もそうだが、美空ひばりさんのレコーディングは、すばらしい。ひばりさんは、レコーディングまでの練習は三回しか歌わなかった。ホクホクなんかに何十回も歌わなければレコーディングできない。いざ、真話も多く披露された。



第71回「スクリーンミュージックでトリップ」
ニューヨークから帰国されたばかりの新進女性映画評論家 きさらぎ尚さんと、
お相手の福田千明さん



第72回「folkloreの魂を歌う」
出演はアンデスの哲学者であり偉大なシンガーでもあるコパンキの唯一の
弟子ソンコ・マージュさん。ほとぼる魂の叫びを歌ってくれた。

Stage

文／編集部



ソッコ・マージュ 荒川義男。1935年生まれ。ギタリスト・歌手。スペイン政府奨学生として、アンドレス・セゴビアに師事。のち、南米の民族音楽フォルクローレの大演奏家アタウルバ・ユバンキに才能を認められ、世界唯一の弟子になるとともに、「心の河」の意の芸名と、愛用のギター（ヌーニェス）を贈られる。1998年、ユバンキの音楽を継承、日本にフォルクローレをもたらした。長年にわたり旺盛な演奏活動を続けた業績に対し、日本文化振興会（総裁・元皇族伏見博明氏）から国際文化栄誉賞を授与された。

時間と民族の境界を越え、変わることはない 音楽を演奏し続ける野人ギタリスト

LPレコードによる「千代田チャリテイコンサート」1999年12月15日 東京・文京区(株)千代田テクノロエントランス・ホール 主催/ (株)千代田テクノロ 協賛/ オルトフオン・ジャパン(株)

芸の道に生きる人間はみな孤独だ。その孤独感がいちはんつのは、舞台での出番を待つ時間ではないだろうか。

昨年の12月15日の寒い夜、第72回千代田チャリテイコンサートの主役はフォルクローレのギタリスト、ソッコ・マージュ。彼は、磨き抜かれたギターと歌の至芸で聴衆を魅了するだけでなく、自身の哲学をまじえた木訥なトークが場をつかむことで

知られた、いまでは生きる伝説のような男だ。

偶然、楽屋がわりのロビーのソファでひとり出番を待つソッコを目にした。頭のはげ上がり、た精力的な風貌、栃木弁まるだし、時には野卑なジョークで聴衆を面喰わせるステージのソッコと、そのようなまるでちがっていった。

孤独が部屋を支配していた。寂寥感というほうがふさわし

く、ロビーが荒野のように広く感じられた。長年、孤独と向き合ってきた峻厳な男の横顔が筆者の存在に気づいて小さく会釈した。その瞬間、この演奏家がこれから聴衆に披露しようとしている芸の重さと長年の精進を思い知らされた。

千代田チャリテイ・コンサートは、(株)千代田テクノロのスポンサードにより、「大切な文化資産であるアナログレコードの灯を消してはならない」とオーディオ界の名門・オルトフオンジャパン(株)社長の前園俊彦氏が中心となって企画から司会進行を受け持ち、8年間にわたる毎月1回ずつとぎれることなく続けるLPレコード演奏主体のコンサートだが、ときおり、ライブコンサートをまじえる。前園氏の広い交際を物語るように、今にも和田誠、及田敏夫、北村英治、佐藤陽子、柳家小三治、永六輔、小椋佳(敬称略)など、そうそうたるメンバーがゲストとしてチャリテイ出演している話題のコンサートである。1999年の最後の回が、この夜のソッコ・マージュのライブだった。

程なくしてギターを抱え、ソッコがステージに登場。ソッコ・マージュとはスペイン語で「心の河」を意味する芸名であ

る。日本人・荒川義男にこの名を贈ったのは、アンデスの心の音楽・フォルクローレの伝承者であり、ギターの世界で南米の巨星と異名されたアルセンチンの故アタウルバ・ユバンキである。

ソッコの太く丸い指が6本の弦にふれ、そこから紡ぎだされた音楽は、日常、私たちをとりかこむ電氣的にパワーアップされた明るく屈託のない音楽とあまりにかけはなれた、おもての夜気がしたたりおち、もつれあうような、沈鬱でくぐもった響きである。しだいに、一首一首の温度感がじんわりと伝わってくる。コンサートの後日、ソッコが自宅でこう語った。「ギターの音楽は、自分に聴かせるものなのです。ギターに語りかけると答えてくれるという、個人的な行為です。感情に忠実に、純粹に弾けば、そのとおりに音が帰ってきます。それに触発されて自分が変わってきます。」

「亡き愛馬」、「牛車にゆられて」、「鳥の歌」、「コンドルは飛んでゆく」、「トウクマンの月」、「インディオの道」など、師のユバンキが復活したトラディショナル、ユバンキ自身の詩・曲になる名曲、スペインのカタルニャ民謡、それにソッコ・マージュの作曲によるものもがつつぎに演奏される。

フォルクローレはいままで、南米のロカルミュージックとしてみな知られ、大きな大学ならたい研究があるほどだが、40年近く前、ソッコの演奏が人々の評判になるまでは、

フォルクローレをだれも知らなかったし、まして演奏する日本人はいなかった。

この夜のコンサートは休憩をはさむ2部構成で、ひよひよとうとしたトークを演奏の合間にほさみ、夜がふけるにつれてソッコのギターも白熱していく。親指以外の4本の指を6本の弦に順にぶつけてバララン、という音を出す「ラスゲアード」のテクニクは、フラメンコで使われるものだが、その華麗な和音が聴けるのも、ギター演奏の技芸を完璧に手中に納めたソッコ・マージュならではのことだ。彼のユバンキに先立つ直伝の師は、ギター音楽を芸術に高めた20世紀の巨人、あのアンドレス・セゴビアである。ソッコはいう。

「音楽とは、ショックアップンバーのようなものです。苦悩にさいなまれたときに自分を浄化してくれるものです。初めて『鳥の歌』を聴いたとき、一晩中涙が止まりませんでした。よるこびの概念であるはずの鳥にも哀しみがある、そこに音楽というものの表現があるのです。」

この夜、ソッコ・マージュの演奏を聴いて帰った人々は幸福である。時代の表層の気分を表現する音楽はもちろんあつていないはずだ。しかし、変わらない音楽があるのだ。地球の真裏にかつて暮らした民族の哀しみ、喜びとわたしたちが、瞬時につながってしまふ音楽をこの夜聴いた。